

第1回「保育所保育実践研究・報告」事業の概要

1. 目的

国家資格となった保育士には、子どもの成長発達と親の子育てを支える専門職として、より高いレベルの保育実践が求められています。日本保育協会では、保育現場における実践の充実と保育士の専門性の向上のために、保育園における現在の課題に対する研究と、日々取り組まれている保育実践に関する事例報告・調査研究などの研究レポートを募集します。いただいた研究レポートは審査を経て表彰し、報告会の開催・研究レポート集の発行を通じて、一般にも広く保育の意義を伝えることを目的としています。

2. 主催 日本保育協会（日本学術会議協力学術研究団体）

3. 後援 日本保育士協会

4. 対象 日本保育協会会員保育園

5. テーマ

（1）課題研究

- ① 赤ちゃんの保育
- ② 発達障害児の保育
- ③ 保育園で気になる子どもの保育
- ④ 食育に関する取り組み
- ⑤ 保育園における教育的営み
- ⑥ 保育園における事故予防の取り組み

（2）自由研究

- ① 保育園での実践事例
- ② 保育園（地域）での調査研究

6. 執筆要領

- （1）原稿は学会・保育団体・専門誌等に未発表のものに限ります。
- （2）原稿はパソコンで作成し、A4判横書きで1枚を40字×40行（1,600字）とし、8,000字以内を厳守してください。
- （3）別紙の研究の要旨を1部、印刷した本文を3部お送りください。あわせて同様の内容を保存した2HDのフロッピーをお送りください。
- （4）図・表・写真は挿入箇所がわかるようにして、別紙にてお送りください。（字数には含みません。）
- （5）原稿の返却はいたしません。また、募集要綱の目的以外には使用しません。
- （6）審査委員会において認められた原稿については、研究レポート集に掲載いたします。その際の著作権は日本保育協会に帰属します。
- （7）査読にあたって、事務局より修正をお願いすることがあります。

<第1回 保育実践・研究報告 課題研究部門 研究奨励賞>

発達障害児の保育—みんなで力を合わせて—

知野 あゆみ

長野県：秋和保育園保育士

生活リズムも不規則な様子が見られた。

1. 研究の目的

本園では、発達障害が穏やかな「たかし君（仮名・年長5歳児）」について、入所してからの3年間、家庭や地域のサービス機関の方と連携を取り、たかし君にとっていかによりよい環境を提供できるのかを探りながら過ごしてきた。日々成長していく中でたかし君にあった生活パターンや、職員の対応の仕方を学びたく、この研究を始めた。

なお、「たかし君にとって」の最良の方法を模索すべく保育を行い、専門家を交えての検討を繰り返したもので、先行研究および比較研究によらないことをここに申し添える。

2. 研究の方法

- たかし君が入所してからの発達面や情緒面、人との関わりなど、様々な面についてよく観察する。
- 定期的に専門機関の方、行政からアドバイスをいただく。
- 家庭との連携を大切にし、信頼関係をつくっていく。
- 家庭や全職員に共通の関わり方、支援の仕方を統一し、共有する。
- 様々な生活パターンを試しながらたかし君の様子を観察し、たかし君に合ったものを取り入れていく。
- 基本的な生活習慣の自立を目指し、発達に合わせ保育をする。

3. 入所当時の本児と家庭の様子

- (1) たかし君は2歳11ヵ月で本園に入園した。発語はほとんどなく、人との関わり方が苦手なように見られた。また、身辺自立については、すべて大人の援助が必ず必要であった。保育士に抱っこやおんぶをしてもらうことが多く、よく甘えていた。丸い形の物が大好きで常に持ち歩く姿や高い所へ登りジャンプをする姿が見られ、落ち着かない様子だった。親に専門機関で見ていただくようにすすめた。3歳児検診で「自閉気味」と伝えられ、病院では知的障害を伴う「重度自閉症」と診断を受けた。（3歳9ヵ月）
- (2) 両親は共働きで忙しいため、19：30まで延長保育を利用して、家庭で両親とゆっくり過ごす時間が少なく、

4. 本児の保育経過 3歳 年少組

3歳児クラスから、たかし君に担当保育士1名がつき、保育士との1対1の関係を大切にして信頼関係を深めることから始め、ゆっくりとたかし君の成長を見守っていくことにした。4歳1ヵ月の頃からパニックを少しずつ起こすようになり、家庭でもパニックを起こすことがあった。園でパニックを起こすと、周囲にある物を次々に投げて自分の体を「め！」と言いながら叩くなどの行動が見られた。そのような時はとにかく抱きしめ「大丈夫だよ」と優しく声をかけていくようにした。パニックの原因をその都度考えると、母親や担当保育士がたかし君から離れたときに起こることが多いのではないかと考えられたので、なるべくたかし君から離れないようにした。また、パニックを起こした時のたかし君の様子を見てクラスの友だちが驚き、遠くから見ている姿がよく見られた。また、担当保育士以外の保育士全員がいつでも対応できるように、たかし君の様子を把握し、接することができるよう記録日誌を回覧し、職員会議等で話し合うこととした。

4歳8ヵ月頃になると、たかし君の支援の体制が少しずつ整い、市の「子ども心の相談室」や知的障がい児通園施設にも通うようになった。

5. 本児の育児経過 4歳 年中組

本園だけでなく、専門施設で過ごすこともよいのではないかと考え、5月から週に1～2日、定期的に知的障がい児通園施設へ通うようになった。日中は障がい児通園施設で過ごし、16：30～本園の延長保育を利用するという日課となった。初日は夕方本園へ来ると保育士の顔を見ると泣き出す姿が見られたが、回数を重ねていくたびに笑顔で登園するようになった。順調なスタートと思われたが、その反面、何か少しでも嫌なことがあると保育士を力いっぱい叩き、物を投げるような姿が見られ、食事面ではお皿ごと投げるなどの行動がしばらく続いた。そのようなたかし君の姿を見て、友だちはたかし君が近づくと離れてしまうという様子が見られた。その場合、必ず保育士がその時のたかし君の気持ちを代わりに伝えて、ただ意味もなく物を投げ、叩いているのではなく、理由があることを説明することにした。

排泄面では、障がい児通園施設へ通い始めてすぐに布パンツ

で過ごせるようになり、本園でも一日布パンツで過ごせるようになり、ステップアップとなった。

(1) 市「子ども心の相談室」にて (6月)

参加者 子ども心の相談室 療育コーディネーター 1名
保健士 1名

本人・母親・担任保育士

- 物を投げる、叩くなどの行動には必ず原因がある。障がい児通園施設に通うようになったことで環境が大きく変わり、混乱しているのではないか。
- 少しずつ慣れるように、障がい児通園施設への回数を週1日にしてはどうか。
- どんなに投げる、叩くなどの行動をしても、決して感情的に怒らず冷静に一言声をかけて終わりにする。
- 毎朝、障がい児通園施設に行くのか保育園に行くのかわからないので、とても不安なのではないか。

(2) 知的障がい児通園施設 言語療法士より (6月)

参加者 知的障がい児通園施設 言語療法士
本人・母親・担任保育士

- 保育士の言葉がけを工夫し、たかし君の選択肢が増えるようにするのがよい。

例) 食事を手づかみで食べている⇒「スプーンを使って!」はダメ。「スプーンを使ってもいいよ!」がよい。

- 食事を投げるのが習慣になっているのではないか。「投げる」にも理由があり、投げるときなたかし君の表情にヒントがあるのでないか。

例) 険しい表情で投げる⇒苦手な食べ物だから投げる
ニコニコして、保育士を気にしながら投げる ⇒自分のことを見てほしい

- 「叩く」については、叩くことを我慢できたらほめ、「叩かなかったらお母さん(先生)うれしいよ」と、こちらのうれしい気持ちを伝えていく。

- 大人に余裕がないと叱ってしまうので、ゆとりが持てるようにしていく。

- たかし君のマイナスを増やすのではなく、プラスを増やし、周囲の友だちに伝えていくことが大切である。

以上のアドバイスを参考にしながら関わっていったところ、9月頃になるとだんだんその姿が少なくなった。

運動会の時期になると、一日のスケジュールが急に変更になり、たかし君に負担をかけることが続いた。大声を出し始めると保育士が何をしても止まらない姿が見られるようになり、対応に困ることが多くなった。

家庭では、父親が怖いようで、父親がたかし君に近づくだけで、両手を伸ばして身を守ろうとする姿が見られたとお聞きした。

(3) 市 「子ども心の相談室」にて (10月)

参加者 子ども心の相談室 療育コーディネーター 1名
保健士 1名

本人・母親・担任保育士

- 大声や奇声を発するのは、運動会の影響ではないか。あと2〜3週間、様子をみてもよいかもしれない。
- 大声を出すことで自分の声が室内で反響し、その声を聞いて更に大声を出していることも考えられる。一つの案として、オルゴールを小さい音量でかけて、耳を澄ませられるようにしてはどうか。(3〜5分間)
- 父親に対する恐怖感の原因は、たかし君が何か問題行動をした時にげんこつをしたからではないか。たかし君が思春期になった時、父親の協力が必ず必要になる。そのためにも父親とのよい関係を築いていかなければならないので、意図的にでも父親とのよい経験を増やすことが必要である。

大声を出してパニックを起こしたときに、静かな部屋でオルゴールをかけたところ、泣きやみ、落ち着きを取り戻すことができた。その度聞かせていくと、オルゴールがなくても静かにすることができるようになった。

この頃から、絵本や書類を見ると必ず破く行動が見られるようになった。観察した様子では、紙を破く感覚がとても楽しいようで、ゆっくり破いたり、早く破いたりした。その都度「破きません」と手を抑えて止めさせようとしたが、その時は止めてもまたすぐに破いてしまうということを繰り返し行っていた。家庭でも同じ行動が見られ、とても困っているとお聞きした。

この頃にはおさまったと考えられた「叩く」という行動がまた見られるようになった。また、相手を足で蹴るようになり、大人一人では制止することが難しくなってきた。

(4) ケア会議 (11月)

参加者 知的障がい児通園施設 在宅支援責任者 1名
保育士 2名

上小圏域障害者総合支援センター

コーディネーター1名

母親・園長・担任保育士

- 叩く・蹴るという行動は、自分の要求が通らなかった時、保育士がたかし君から離れて他の友だちと遊んでいた時など、様々な原因が考えられる。たかし君はとても独占欲が強く、保育士を独り占めたいと考えているのではないか。

○大人に自分の要求を受け入れてもらえるとうわわっているだけに、その要求を受け入れてもらえるまで通し続けるということがある。全てを我慢させるのではなく、状況を見ながら少しずつ我慢することができるようにしていった方がよいのではないか。

- 母親の仕事が忙しく余裕がないとき、たかし君にも伝わってしまい落ち着かなくなってしまう。

(5) 市 保育巡回指導 (11月)

参加者 養護学校 相談支援室 教諭 1名
市児童保育課 障害児担当保育士 2名
母親・園長・担任保育士

- 担当保育士との信頼関係は十分にできているようである。
- たかし君が問題行動をした時に反応するのではなく、よいことをした時に反応して、たくさんほめるのがよい。
- 叩く・蹴るについては、その行動が出る前に何らかのサインがある。たかし君の場合は、奇声(大声)を出すことで周囲に気持ちを伝えているのではないか。そのサインを見逃さずに対応していくのがよい。
- 「サポートブック」を作り、誰がいつ見てもたかし君はどんな子なのかをわかるようにする。
- 保育士の関わり方として、自分がたかし君に何を言ったのかを忘れないようにして、言ったことは必ず行うようにする。

以上のことを考慮しながら、たかし君と関わり、集団の中で過ごしていると、最初は落ち着いていても、少し経つと奇声らしき声を出していることに気が付いた。そのサインを受けその場から退室し、別の遊びに誘うととてもうれしそうに遊んでいる姿が見られた。その結果、パニックを起こすことが減り、安定して過ごせるようになった。このことから、周囲にいる人の関わり方がたかし君にどれほど大きく影響するのがよくわかった。

サポートブックは、家庭で製作していただくことにして、日頃の園での様子を詳しく伝えていくようにした。

両親の仕事が忙しいため、毎日延長保育を利用していた(～19:30)。他にも延長保育を利用している子が多いので、18:00までは1対1でたかし君専任の延長保育担当保育士をつけることにした。しかし、混合保育のために落ち着かず、お迎え時間が毎日違うため混乱した様子が見られた。パニックを起こした時は、別室で落ち着くまでゆっくり過ごした。18:00を過ぎると、延長保育担当保育士2人で見ていたが、たかし君に合わせた保育は難しく、何とか環境を整えようと試行錯誤をすることになった。

(6) 保育相談 (12月)

参加者 養護学校相談支援室 教諭 1名
国立特殊教育総合研究所 研修員 1名
市児童保育課 障害児担当保育士 1名
母親・園長・担任保育士

- たかし君はまだ保育士と1対1で過ごす時間が大切な時期で、集団への参加は負担をかけてしまうのではないか。
- 延長保育の時間が、たかし君にも保育園にも一番の問題ではないか。福祉サービスや知的障がい児通園施設に協力をしてもらい、たかし君、家庭、保育園にとってよいやり方を考えた方がよいのではないか。

10月頃から見られた何でも破いてしまう行動は変わらず続いているが、ダンボールを小さく切った物に興味を向けて裂くように誘っていくと、夢中に遊ぶようになった。破いてよい紙といけない紙を保育士の指示で区別できるようにしていった。

保育園や障がい児通園施設などで様々な人と関わり、クラスの友だちと一緒に過ごしていくうちに言葉が多く出るようになってきた。また、全職員の顔写真や生活の行動を写真カードにして見せて過ごすようにしたところ、生活の中の行動については言葉の意味が理解できるようになり、保育士とのコミュニケーションもだいぶとれるようになった。

(7) ケア会議 (3月)

参加者 養護学校相談支援室 教諭 1名
国立特殊教育総合研究所 研修員 1名
上小圏域障害者総合支援センター
コーディネーター 1名
市福祉課担当職員 1名
両親・園長・担任保育士

①新年度、年長になるたかし君の保育について

○本人も保育士も夜7:30までの保育は負担が大きいので、日中は本園で過ごし、延長時間(16:30～)を在宅支援の方をお願いするのはどうか。1対1のため、ゆっくりたかし君と関わることができ、落ち着いて過ごせるのではないか。毎日同じ在宅支援は難しいので、障がい児通園施設のサービスも一緒に受けていくという方法もあるとお話しをお聞きする。

- ・(月・火・木) 障がい児通園施設タイムケア
- ・(水・金) 在宅支援

○3～4ヵ月に1回はたかし君に関わる者たちが集まってケア会議を行い、それぞれの様子を話し合い、考え方を統一し、共有できるようにする。

以上の生活で新年度から過ごしていくようにした。

6. 本児の育児経過 5歳 年長組

進級後のクラスの状況は、たかし君と2年以上一緒に過ごしているためか、友だちもたかし君を自然に受け入れている。友だちも保育士の言葉がけを真似して、「たかし君ここに置きます。」「たかし君座ります。」などと言っている姿が見られた。環境が変わり、たかし君が不安定になってしまうのではないかと心配されたが、思っていた以上にスムーズになじんでいた。

保育士から見て危険だと思われる行動に対して、「たかし君これは×(バツ)です!」と言うだけで止められるようになった。また、給食やおやつ配膳中は保育士と離れられないことが多かったが、「ご飯配ります。座って待っていてね。」と声をかけると、一人で椅子に座って待てるようになった。一方、落ち着いてきた反面、床や洋服へのつば吐きが多く見られるようにな

った。また、食事をほとんど摂らなくなり、すぐに「いらない。」
と言ひ、保育士に食事を渡すようになった。今まで喜んで食べていた物も気分によって食べなくなった。

(1) ケア会議 (4月)

参加者 知的障がい児通園施設 在宅支援責任者 1名
上小圏域障害者総合支援センター
コーディネーター 1名
在宅支援センター 1名
母親・園長・担任保育士

①延長時間のサービスを開始して1ヵ月後の過ごし方・様子について

- とても落ち着いていて、たかし君にとってよい方向へ向かっているのではないかと。
- つば吐きは、タオルやハンカチを常に持たせそこにつばを出すように声をかけていく。つば吐きによって自分のことを見てほしいとアピールしているということも考えられるので、保育士がつば吐きに対して過剰反応しないようにする。

この頃になると、紙を破くという行為はほとんど見られなくなってきた。また、一日落ち着いて過ごせるようになり、順番待ちでは、「順番です」と言い前にいる友だちの裾を持たせると、一人で待ってられるようになってきた。

食事については以前と変わらず、見ただけで「いらない」と言い保育士に手渡ししてくる。家庭ではよく食べていると言ふことなので園では無理に食べさせず、給食が嫌いにならないようにする。

(2) ケア会議 (6月)

参加者 知的障がい児通園施設 在宅支援責任者 1名
上小圏域障害者総合支援センター
コーディネーター 1名
在宅支援センター 1名
両親・園長・担任保育士

①つば吐きについて

- つば吐き用のタオルは、本来、出したつばを拭くためのタオルであるが、つば吐きより先にタオルがあるという状態にあり、癖になってしまうのではないかと。

②就学について

- 来年は就学なので、地域の養護学校へ行くのか、普通学校の特別クラスへ行くのかを考えていく必要がある。両親は、たかし君の姉が通っている地元の普通学校に通わせたいと考えている。教育相談を受けるとともに、各学校をよく見学してどちらの学校がたかし君に合っているのかを見つけていくようにする。
- 延長保育の支援については、今後もこのままの支援で行っていく。

(3) ケア会議 (7月)

参加者 上小圏域障害者総合支援センター
コーディネーター 1名
在宅支援センター 1名
市児童保育課 障害児担当保育士 1名
母親・園長・担任保育士

①プール支援について

- たかし君はプール遊びが大好きで、保育園のプールでは体を思い切り動かして楽しんでいるので、夕方を利用して在宅支援の方(プール専門)にプールに行き支援してもらってはどうか。

②自宅のガスレンジでの火遊びについて

- 火遊びは絶対にしてはいけないことなのではっきり「いけない」と伝えることが大切である。
- 母親がどんなに怒ってもやめる気配がないようであるが、「火」ではなく、他の遊びへと気持ちを向けていく必要がある。
- 例えば、台所で母親と一緒に並び、たかし君の大好きな野菜切りをさせてあげてはどうか。

早速、毎週1回夕方に園近くのプール施設で一時間ほどプール遊びの支援を受け始めた。たかし君はとても楽しいようで、終了後は満足気な様子で帰宅していた。

また、家庭での火遊びについては、母親がきゅうりを一緒に切ろうと誘うようにしていくと、あまり見られなくなってきた。クラスの友だちとの関わりでは、少しずつ友だちの存在に気付き始め、たかし君から友だちの肩を組む、手を握るなど関わる姿が見られるようになった。

(4) ケア会議 (10月)

参加者 知的障がい児通園施設 在宅支援責任者 1名
上小圏域障害者総合支援センター
コーディネーター 1名
在宅支援センター 1名
市児童保育課 障害児担当保育士 1名
母親・園長・担任保育士

①プール支援の状況

- 初めは無反応であったが、笑顔で楽しむようになってきた。

②クラスでの様子

- 友だちや保育士に抱っこやおずりを頻繁にするようになった。

③就学について

- 両親の希望は地域の小学校へ入学させたい希望は変わらないが、市内での養護学校へ体験入学し、その様子からたかし君にとってよい進路を決めるのがよいのではないかと。
- 市教育委員会の就学指導委員会のアドバイスを受けて最終的に学校を決定するとともに、今後もケア会議を定期的に開き、たかし君の支援を行っていくこととする。

(5) ケア会議 (11月)

参加者 知的障がい児通園施設 在宅支援責任者 1名
上小圏域障害者総合支援センター
コーディネーター 1名
在宅支援センター 1名
市児童保育課 障害児担当保育士 2名
母親・園長・担任保育士

①保育園での様子

- 園児服をハンガーに掛ける練習を行う。また、給食用エプロンに汁物・ご飯・お箸などの絵を描き、食事の位置を覚えるようにする。
- 女兒への抱きつき、ほおずり、キスをしようとするが、「握手します」と声をかけることで改善が見られた。

②障がい児通園施設での様子

- パズルを楽しんでいる。
- トイレでは全部ズボンをおろしてしまうので、前だけおろすように習慣をつけていく。

③在宅支援での様子

- プール以外は母親の職場にいる。母親の近くにいることが多いので、落ち着いて過ごしている。

④就学について

- 就学指導委員会において、「養護学校への就学が望ましい」との判定を受ける。
- 両親は、判定後も子どもの同士の中で成長するのがよいとの考えから、地元の小学校への就学を希望している。

⑤今後の関わりについて

- 自分で着脱衣できるように指導する。洋服一式の準備や脱ぎっぱなしをなくすようにする。
- 「終わる」の合図を全員で統一する(手のサイン)。

相談の結果、養護学校への就学を決める。

(6) ケア会議 (1月)

参加者 上小圏域障害者総合支援センター
コーディネーター 1名
在宅支援センター 1名
市児童保育課 障害児担当保育士 1名
養護学校低学年担当教諭 1名
母親・園長・担任保育士

①保育園外の様子

- プールでは手足を大きく動かし、本当に楽しそうである。波のプールにも自分から向かっていく姿が見られた。
- 自宅ではブロック遊びが多く、ブロックが収まらないと奇声をあげている。

②園内での様子

- 折り紙の「やっこさん」を覚え、繰り返し折っている。
- 言葉が増え、友だちとの関わりが増えた。
- 寒さを嫌っているようだが、外遊びができるようになった。

③養護学校に向けて

○家庭で、朝夕の生活の流れがわかるように布製のスケジュールボードを作り、できたら印をつけるなど工夫して生活自立を目指す。

○母親は養護学校だけでなく、小学校との交流を希望している。

○養護学校の体験入学を行う。

④今後の支援について

- 保育園でのケア会議の最終回を3月下旬とし、養護学校低学年担当者を含めて検討する。
- 入学後の夕方支援は引き続き行うことを決定する。
- 養護学校と小学校自立学級との交流会については検討する。

7. 事例の考察

障害児であることがはっきりしていなかった入所当時は、保育士を含め、たかし君を見ている人たちが、どう関わって、どう援助をしていったらよいのかまったくわからずにいたが、様々な施設や専門機関の支援を受けたり、アドバイスを受けたりして、今まで過ごすことができた。

この3年間でたかし君の支援や関わり方についての話し合いは、ケア会議が11回・市子ども心の相談室が10回・市巡回指導が4回・教育相談が1回、行われた。その中で担当保育士の関わり方や多くの支援を受けて、たかし君が様々な面で日に成長していく姿を見ることができた。

たかし君の家族や私たち保育士全員がここまでたかし君を知ることができたのも、専門機関の協力がなくてはできなかったのではないだろうか考える。また、「たかし君」を通して、クラス子どもたちやその保護者の暖かさや、専門機関との連携の大切さを知ることができた。現在も、就学してからたかし君に一对一の援助ができるかななどの問題が残されてはいるが、今後もたかし君の成長を見守っていきたい。

<第1回 保育実践・研究報告 課題研究部門 研究奨励賞>

こどもと食をつないで—楽しさと大切さを伝える—

富沢 綾

埼玉県：優々の森保育園管理栄養士

1. はじめに

日本は古くから米を主食とし、独自の伝統や文化が受け継がれてきた。しかし、食生活の欧米化や核家族化などにより、それらがなくしがらにされつつある。また近年青少年による犯罪が問題となり、食が心に与える影響についても取り上げられるようになった。

このような時代であるからこそ、伝統・文化・食事の大切さ・命の大切さなどを幼児期から伝えていくことが大切であり、保育園給食の役割のひとつと言えるだろう。

日々の生活の中でこれらのことを意識しながら子どもたちと関わってきた。

2. 研究の動機

食材の話などをしていくうちに食への興味・関心が出てきた。ピーマン・おくら・なす・ミニトマトを育てて食べたり、芋ほりの芋を焼き芋にしたりと子どもたちと食を繋ぐような投げかけをしてきた。

5歳児には、さらに深く食について知り考えてもらうため、食について話す機会を設けた。

2. 研究の目的

- 食べ物への興味・関心をさらに高め、バランスの良い食事について考える。
- 自分の体・排泄物に関心を持ち、健康な体について知る。
- 食べ物は生命であり、その生命をいただいていることを知り、感謝の気持ちを持つ。

3. 研究の対象

入所児童（5歳児） 計9名

4. 研究の方法

各回（全6回）ごとにテーマを決め、主に食育絵本にそって話を進める。

5. 研究期間と場所

平成18年1月～3月（計6回）

・時間：13時半～15時

・場所：5歳児クラス内またはマルチスペース

6. 食育絵本によるお話

(1) 第1回 1月13日（金）

テーマ：元気はどこからくるのか ・体の中の仕組み
：いいうんちについて

①内容

○朝ごはんを食べてきたか。またどのような物を食べてきたか。

A：チョコパン2個・ココア

B：ピーナッツパン・お茶

C：チャーハン・お茶漬け・りんごジュース小2缶

D：ドーナツ小5個・ヤクルト

E：おにぎり小3つ（具無し）

F：チョコパン1つ

G：ごはん・目玉焼き・納豆・スープ

H：チョコパン・コーンスープ・オレンジジュース

I：卵焼き・パン・牛乳

○『食育絵本—みんなげんき—』を通して食べ物から元気をもらっていること、4つの食品（赤・黄・緑・白）の働き、またバランスよく食べることの大切さを伝える。

○スゴクを楽しみながら、体の中（食べ物の通り道）について伝える。

②子どもの様子

○興味を持って真剣に話を聞く姿が見られた。赤・黄・緑・白の4つの食品を食べると良いことは理解できたようだが、食品の分類は覚えにくいようであった。

○スゴクは昨年よりもルールを理解出来、子供同士で楽しみながら行っていた。体の中の絵にも興味を持ち、不思議に思ったり、驚いたりする様子も見られた。自由な時間の際にも子どもたち自らスゴクを楽しむ姿も見られた。

③所感

○朝食抜きはなかったが、メニューは各家庭で差が見られた。回を重ねるごとに子どもたちの意識が少しでも変わると良いだろう。食品の分類や働きについても少しずつ覚えられるように投げかけていきたい。

(2) 第2回 1月27日(金)

テーマ：朝ごはんはなぜ食べるのか

：バランスの良い食事とは

：旬について

①内容

○前回のおさらい(食品の分類には何色があるか・どのような働きがあるか)

○朝ごはんは一日の元気の源であるという話をする。

○『食育絵本—みどり—』を通して、緑の食品にはどのようなものがあり、どのような働きがあるか伝える。

○日本には四季があり、旬の食材には元気の素がたくさん入っていることを伝える。

○食べ物カルタを行い、様々な食品を知ると共に、カルタに書かれている食品の分類についてひとりずつ考える。

○バランスの良い食事をするには、4つのおさら(主食・主菜・副菜・汁)を組み合わせると良いことを話す。

○牛乳は骨を強くしてくれるので大切な飲み物であることを伝える。

②子どもの様子

○食品の分類については少しずつ覚えられているようであった。朝ごはんは「元気が出るから食べる」などと言う児もおり、大切さについては漠然と認識しているようであった。

○絵本は楽しみながら熱心に見ていた。給食にでる食材も旬の物が多く使われていることを話すに納得した様子で聞いていた。

○カルタはルールをみんなで確認し合いながら、楽しんで行っていた。自分がとったカードの食品をひとつずつ分類してもらったが、すぐに答えられたり、また初めて出てきた食材に戸惑ったりしている様子があった。その都度説明をしながら分類したことで納得出来た様だった。

○話が終わった後のおやつにレーズンがあり、いつもは残してしまう児が全部食べられていた。聞くと「たまには食べてみようと思って」と話していた。

③所感

○絵本を活用していることで、子ども達にも分かりやすく、興味を持っているので大変良いと思う。カルタを使って一人ずつ食品の分類をしたが、個人差があり覚えにくい児もいたので、分かりやすいように話しながら引き続き投げかけていく。

○4つのおさらの説明はあまりうまく伝わっていないようだったので再度説明したほうが良いと思った。

○いつもは残すレーズンを食べてしまい、とても驚いた。食育の話が少しずつ子どもの心に響いているようで大変

嬉しく思った。

(3) 第3回 2月1日(水)

テーマ：お米について

：三角おにぎりに挑戦

①内容

○4つのおさらについて給食を用いて説明する。

○『食育絵本—きいろ—』を通してその食品と働きについて伝える。

○お米の種類(ジャポニカ・インディカ)と形、給食で食べている七分つき米について話をし、観察してもらう。

○日本では昔からお米を主食としており、日本人の体にも合っている。また食事を「ごはん」と呼ぶことや、国旗が梅干ご飯を表していることから、お米が日本人と深い関係にあることを伝える。

○クラスでひとつのお弁当を作るため、身近な素材で一品料理を工作しておくように話した。

○三角おにぎりの作り方を説明し、ラップを用いて実際におやつのおにぎりをにぎる。

②子どもの様子

○4つのおさらについては前回よりも理解出来たようだった。

○お米はそれぞれとても熱心に観察していた。説明だけではなく、観察したことで七分つきということが分かりやすかったようだ。

○三角おにぎり作りは前日から楽しみにしていたようで、わくわくしている様子がうかがえた。三角にしようとして一生懸命になり、出来上がったおにぎりを見た時はとても満足そうだった。いつもよりも嬉しそうにかぶりつき、「おいしい〜」と言ってすぐに食べ終わってしまった。

○数日後には、「昨日家に帰ってからおにぎりつくった」「朝おにぎり作って食べてきた」と嬉しそうに話してくれる様子も見られた。

③所感

いつもと変わらない五目おにぎりだが、自分でにぎると格別においしいようで表情が輝いていた。ほんの少しでも投げかけ方によって、子どもたちは生き生きとするのだと改めて感じた。また一歩食への興味が広がったのではないかと思う。

(4) 第4回 2月16日(木)

テーマ：「いただきます」「ごちそうさま」の意味

：バランスの良い食事について

：いいうんちをだすために必要なこと

①内容

○『食育絵本—あか—』を通して、食品の働きとその分類や加工食品について話す。

○きょうの給食には何が入っていたか考え、またその食品を働き別に分類する。

- 「いただきます」「ごちそうさま」は食事を作ってくれた人たち、野菜などを育ててくれた人たち、そして動植物の命をいただくことに感謝して言おうと伝える。
- “うんち表”（2月6日より開始）を確認し、いいうんちをだすには、水分をとる・緑の食材を食べる・体を動かして遊ぶ・朝ごはんをしっかり食べてトイレに行く習慣をつけることが大切であると伝える。
- ご飯時にジュースを飲むと、甘いのですぐにお腹がいっぱいになってしまう、食材の味が分からなくなってしまうので、水やお茶を飲む方がよいことを伝える。
- それぞれが作った一品料理（工作）を発表し、みんなに見せる。
- 保育園最後に食べたい給食を聞く。（その中から栄養士が選び、最終日のリクエスト献立とする。）

②子どもの様子

- 絵本にでてくる内容に感心したり、初めて知って驚いたりしながら楽しんで見ていた。
- 動植物は生きていて、その命をもらっているのだから感謝して食べようという話では納得した様子でしっかりと聞いていた。
- 日頃から「今日バナナうんちでた」と報告してくれる児もいたが、“うんち表”を改めて通して見ると、毎日バナナうんちが出ている児・ころころうんちがでる児・何日かでていない児など様々であった。どうしたらバナナうんちが出るかを説明し、うんち表に色がぬれるようにこと促した。その後はお茶をおかわりして飲む姿も見られた。
- ジュースをご飯時に飲まない方がよいという話も、納得したようで「ジュースは少ししか飲まないようにしましょう」と話す児も見られた。
- 一品料理の発表では、恥ずかしがったりしながら見せたり、また友達が作ったのを見て「じょうず〜」「すご〜い」などと歓声をあげていた。
- 保育園最後に食べたい給食を聞くと料理名が分からない児も多かったが、メニューを言うと「それもこれも！！」と言い、たくさんの料理があげられた。

③所感

- 命をいただいていること忘れないように時々声掛けをして、心に深く刻んでいって欲しいと思う。お弁当作りはこちらの意図とは違う方向に行ってしまったが、絵を書いたりして個々に工夫し、楽しめたようなので良かったと思う。
- “うんち表”はうんちの種類によって色分けしたので一目瞭然で見やすく、子どもたちにも分かりやすかったので良かったと思う。今後も継続し様子を見ていきたい。

(5) 第5回 2月20日（月）

テーマ：「だし」について知り、おいしさを味わう

①内容

- 『食育絵本一しろう』を通して、働きとその分類につい

て話す。

- 食事の際、胃が驚かないように汁物を先に飲むと良いことを伝える。
 - 4種類を試飲する。（ア にぼしだし汁・イ にぼしだし汁+みそ・ウ 水+みそ・エ こんぶ・かつおだし汁）
 - アにみそが入ったイは生臭さが消えている
 - イ・ウは味噌の量は同じだが、イの方が濃くおいしい
 - エはアとは違う匂いや味がする
- これらを実際に味わって確認する。

②子どもの様子

- 4種類を試飲した時、アは「魚のにおいがする」、イは「おいしい」「いつもの味噌汁の味がする」、ウは「イよりうすい」「いつもの味噌汁の味と違う」、エは「おいしい」と話していた。違いに驚いたり、まただしを味わえたことが嬉しかったようで、家でお母さんに話をした児もいたようだ。
- 給食の際には「味噌汁から飲んだよ」「汁から飲むのを忘れちゃった」などと話す姿も見られた。

③所感

初めは何が入っているのかを知らせずに試飲してもらった。子どもたちが違いに気づいたことには大変驚き感心した。給食が薄味であり、また何が入っているかなど声掛けをしてきたことで、しっかりと味わって食べることが出来ているのだと大変嬉しく感じた。

また汁物を先に飲むということを意識して、直ぐに実行しようとする姿があり嬉しく思った。

(6) 第6回 3月6日（月）

テーマ：箸の持ち方・食べ方について

：印象的だったことを絵に描く

：おにぎりパーティーをする

①内容

- 第1回～第5回までのおさらいをする。
- 朝ごはんは何を食べてきたかを聞く。
- 箸の正しい持ち方・良い食べ方（棒食べ・稲妻食べ）について話をする。
- 日本型の食事形態である口中調味について話をする。
- これまでの中で楽しかったことや、印象的だったことを絵に描く。
- 子どもたちが好きな具をつめておにぎりを作り、海苔を巻いて食べる。

②子どもの様子

- 絵本を見ながら今までやってきたことを思い出しているようだった。
- 絵は恥ずかしがったりしながらも熱心に描く姿が見られた。
- おにぎり作りでは栄養士の話を意識して、友達の分の具を取り過ぎないように慎重につめる様子が見られた。のりの裏表もしっかりと確認して、楽しみながら海苔を巻

き「おいしー！！」と言いながら嬉しそうに食べていた。

③所感

- 食品の分類や働きのおさらいでは個人差が見られ、覚えることが難しい児もいたようだ。朝食の内容は、第1回とあまり変化は見られなかった。短期間だったこともあるが、子どもたちが家で話をしている、実際の食事内容が変わるまでには至らなかった。保護者に対しても直接話す機会を設けられるといいと思った。
- 絵には、だしを飲んだこと、かるた・スゴロクをしたことが多く見られ、話よりも実際に体験した事の方が印象的だったようで、理論と実践を組み合わせて行って良かったと思った。
- おにぎりパーティは、ラップで三角おにぎりを作った際、子どもたち自らが「今度はいろんな具を入れて、海苔を巻きたい」と言ったことがきっかけとなった。具も子どもたちが提案した中から選び、おおか・鮭・ツナマヨにした。みんなが嬉しそうに作っている姿を見て、子どもの「やりたい」気持ちを尊重出来たことは大変良かったと思った。
- 「うんち表」への記入は子どもたちの要望により継続することになった。

7. 食育絵本の内容紹介

子どもに話を進めるにあたり活用した『食育絵本』の内容を記す。

①食品の分類

- 赤の仲間（体を丈夫にする）：肉・魚・豆腐・牛乳・豆・卵・チーズ等
- 黄色の仲間（強い力をつくる）：ごはん・パン・スパゲティ・じゃがいも等
- 白の仲間（おいしい味のお手伝いをする）：かつおぶし・砂糖・塩・酢・しょうゆ等
- 緑の仲間（病気から守ったり、いいうんちがでるお手伝いをする）にんじん・ピーマン・ほうれんそう・しいたけ・りんご・わかめ等

②4つのおさら

- 主食：主に黄色の仲間の料理（例：ごはん・食パン・ナポリタン・煮込みうどん）
- 汁：主に白の仲間の料理（例：味噌汁・スープ・かきたま汁・きのこ汁）
- 主菜：主に赤の仲間の料理（例：ハンバーグ・鮭のムニエル・唐揚げ・麻婆豆腐）
- 副菜：主に緑の仲間の料理（例：ひじき煮・きゅうりのあえ物・れんこんのきんぴら）

8. 総評・総評

(1) 5歳児担当保育士より

食育について一定期間話をしてもらったところ、予想してい

た以上に子どもたちが興味を持つことが出来たので驚いた。

特に保育士から問いかけなくても、給食中おかずの中から「これは赤の元気ツズだね」「緑の元気ツズはどれかな？」と子ども同士で考えてみたり「おなかびっくりしちゃうからお味噌汁から飲もう」と栄養士から学んだことをよく意識し、自ら行おうとする姿が見られたことは大変素晴らしい事だと実感した。

実際に複数の「だし」を飲んだりにおいを嗅いだりして、普段自分たちが口にしていない物をより詳しく知ることが出来た。また、「たくさんの“命”を頂いている」こと等食に関する大切な事を知る良い機会になったと思う。

今年度だけではなく、今後も継続していけると良いと思った。

(2) 給食担当管理栄養士より

子どもたちは食に関する様々なことを知ることにより喜びを感じ、得た知識を意識して実践しようとする姿が見られた。「汁を先に飲むと良い」「棒食ではなくて稲妻食で食べよう」などと話をすると、次の給食ではみんなで声を掛け合って食べていた。

またうんち表を作り、自分の排せ物に関心を持たせたことで“健康な体”を意識し、良いうんちが出るように毎朝トイレに行くなどの変化も見られた。

話をするだけではなく、絵本やスゴロク・カルタを活用したことや、実際にだしを味わったり、おにぎりを作ったりして五感を刺激したことでより興味を引き出すことが出来たと思う。また子どもたちが家で話をすることで保護者にとっても良い機会となったのではないと思う。

給食の際「ごちそうさまでした・・・あつ、間違えちゃった。もう一回言おう。（心を込めて）ごちそうさまでした。」と言う子どもの姿があった。私が一番伝えたかった“食べる＝命を頂いている”ことをしっかりと心に刻んでくれているのだと思い、大変嬉しく感じた。今後もこれらの気持ちや食事の大切さを忘れず、元気な体と素直な心で育てて欲しいと思った。

8. おわりに

今回の食育への取組みを行ったことで、子どもたちの吸収力には私自身も驚かされ、また“子どもたちの興味は投げかけ次第で広がる”ことを再認識出来た良い機会であった。

家庭養育機能の低下が危ぶまれる中、保育園給食が果たすべき役割は大きいと感じた。

今後も栄養士のみならず保育園全体で食に対して考え、子どもや保護者に投げかけていけると良いだろう。

<第1回 保育実践・研究報告 自由研究部門 研究奨励賞>

連絡帳を通した実践事例を通して

水口輝美

富山県：わかくさ保育園保育士

1. 研究の動機

保育士として乳児保育を担当するのは今回で4回目。その間、自分自身も2児の母親となり、保育園にお世話になってきた。

子どもを預かる側と預ける側の両方の立場をとるなかで感じてきたことは、園と家庭がどうすれば信頼関係を結ぶことができるのか、という点である。特に0歳児での入園は子どもが家庭から離れる初めての経験であり、保護者も大きな不安をかかえている。安心して預けてもらえるにはどうすればよいのか？を改めて考えてみた。

「保育所保育指針」の中の「6か月から1歳3か月未満児の保育の内容 保育士の姿勢と関わりの視点」のなかに「家庭との連携を密にし、1日24時間を視野に入れた保育を心がけ、生活が安定するようにする。」という部分がある。

そこで、1日24時間を視野に入れる保育を基本にして、家庭生活と保育園での生活に連続性、継続性がある保育を行うことで子どもも保護者も安心できるのではないかと仮説をたて、その方法をさぐってみることにした。

2. 研究の方法

朝、夕の送迎時に、帰宅してから今朝までの様子を聞くと共に、「連絡帳」から、家庭での生活リズム、家庭での育児の方法（方針）、保護者の思いや願いを読み取り、それらに合わせた保育を考えて実践し、それを適切に保護者に伝える。

3. 実践～各事例を通して

(1) 事例1

1歳2ヶ月女児（I子）。離乳食が順調に進み、食事は完了食の段階になっている。しかし、毎朝食後ミルクを哺乳瓶で飲んでくる。「そろそろ牛乳へ切り替えていけるといいですね。」と話しをしているが、「ミルクを欲しがるとついやってしまうのです。」と言われる。両親ともフルタイムで働いていて、毎日早朝保育、延長保育を利用している。育児にはあまり積極的ではなく、近くにアドバイスしてくれる人（祖父母など）もいない。

①連絡帳から読み取れること（資料1）

○牛乳を家で飲んでみてはいるが、「べー」と出されてしま

った。すすんで飲んでくれない様子。

○いつもは朝食後にミルクを飲んできているのだが、この日は朝食を食べず、ミルクだけである。もしかして、I子がぐずぐずいってミルクをほしがっているのではないかとグズグズの原因は睡眠時間が少ないことも関係していないか？

○ミルクを欲しがるといふより、哺乳瓶が離せないのではないか？

○育児の方法がよくわからず、離乳の必要性を感じていないのではないか？

②考えられる保育の方法

○睡眠時間が短いので、眠気があるのならば、少し眠ってスッキリさせてあげよう。

○アレルギーがないようなら、園でも少しずつ牛乳を進めると、保護者の気持ちに余裕が出来るのではないかと？

○哺乳瓶からコップに移行できるよう練習しよう。

○発育の状態から、離乳の必要性を話してみよう。

ということで、その日の連絡帳に次のような返事を書いた。（資料1-1）

③経過

次の日、保護者から、次のような返事が返ってきたので、（資料1-2）早速園でも牛乳を進めてみた。

○8月2日（水）

3時のおやつ時にコップに、牛乳をいれて飲ませてみる。1口だけ飲むが、後は嫌がり飲まなかった。（資料1-3）

○8月3日（木）

10時のおやつと昼食時に、コップに牛乳をいれて出すが、首を振って飲まない。夕方、今までミルクを飲んできた時間に牛乳を少し温めて哺乳瓶に入れると、60ccのみ、まだ欲しいといってさらに50cc飲む。

○8月4日（金）

夕方、温めたミルクを哺乳瓶で100cc飲む。

○8月8日（火）

夕方、温めたミルクをコップで5～6口飲む。牛乳をすすめると同時に哺乳瓶を離す事をすすめる。

○8月10日（木）

朝食をしっかりと食べ、ミルクを飲まないで登園してきた。

⑤結果

- 保育園に預ける時間が長く、家庭で過ごす時間が短く、また育児にあまり積極的ではないI子の母親に、思うようにすすまない牛乳を飲ませてもらうことは負担になるのではないかと判断して、「保育園でも一緒にすすめますよ。」「少しづつがんばりましょうね。」という協力の姿勢を知らせることで、育児に対する負担を少し軽減してあげられているようである。
- 育児の経験がなく、知識も浅い保護者に離乳の必要性を話すことで、前向きに取り組もうとする姿が少しづつ見られるようになってきた。
- I子は、少し支えてやることで、だいぶ自分でコップを持って飲めるようになってきた。
- 一日一回少しづつ牛乳を試すことで、以前よりも飲めるようになってきている。また夕方のミルクも欲しがらない日がでてきている。

(2) 事例2

事例1と同じ1歳2ヵ月月女児（I子）。軟便の症状がでてから、4～5日経過している。医療機関にはかかっているが、なかなか治らない。以前から、軟便になると、下痢になりやすい。

①連絡帳から読み取れること（資料2）

- 軟便の症状が続いていて、今朝も1度でている。
- 普段は完了食を食べているが、軟便の症状が続いているのでおかゆを食べてきているが、軟らかくて食べやすいと思ってか、納豆を食べさせている。（資料2-1）

②考えられる保育の方法

- 本児の体調に合わせた適切な食事、おやつを準備する。
- 家でおかゆを食べてきているので主食はおかゆ、もしくは、しばらくおかゆばかり食べているようなら、食欲もあるので、うどんを出してあげよう。
- 園でのおやつや食事内容を伝えて、食べていいもの、食べない方がいいものを知らせてあげよう。

③経過>

- 8月22日（火）（資料2-2）
 - ・午前のおやつ お子様せんべい1枚、お茶1杯
 - ・昼食 うどん、かぼちゃ煮、白身魚煮、お茶1杯
 - ・午後のおやつ 卵ボーロ、お茶1杯
 - ・延長時間のおやつ お子様せんべい2枚、お茶1杯
 - ・消化の良い食べものを用意し、水分をこまめに摂るよう気をつける。
 - ・食欲は低下していないので、食事制限が本児にとってストレスにならないようメニューを考えて、昼食はおかゆではなくうどんにした。
 - ・延長保育時間のおやつについても、担当の保育士と食べていいものについて連絡をとる。

- ・その日の連絡帳に、食べものについてアドバイスする。（資料2-3）

④結果

- 体調が悪いということを知らせてもらったことで、この日、I子の身体の状態をよくみて、その状態に合わせた保育ができた。
- 次の日以降、軟便の時は、食事内容に気をつけられるようになった。
- 連絡帳で毎日の様子を伝えあうことで、体調が悪い場合、いつからどのような症状が続いているのかがわかり、その間の食事や内容などについても見直し、アドバイスしてあげることができる。特に、医師や周りの人からアドバイスを受けられない場合は、病気の時の生活の仕方や食事の仕方を教えてあげること、24時間をおして病気の回復に努めることができるようになる。体調が悪い時こそ、園と家庭との様子を詳しく伝え合うことが必要なのでは、と思った。

(3) 事例3

1歳3ヶ月男児（T男）。順調に発達の段階を追って成長してきている。第一子で、おとなしい性格。保護者は育児に前向きだが、連絡帳はほとんど書いてこられず、家庭での様子がわかりにくい。

①連絡帳から読み取れること（資料3）

- 前日の園からの連絡帳を見て、家庭での本児の様子と重なるところがあるようで、返事を書いてこられた。
- 家でも何か歌ってやりたいが、どんな歌を喜ぶのかわからない。
- 簡単な手遊びやわらべ歌なども知りたいと思っておられるかも？

②考えられる保育の方法

- 歌や手遊びを喜んでする時期になってきた。季節の歌やわらべ唄、手遊びなどをたくさんしてあげよう。
- 保育園での本児の様子をできるだけ知らせてあげよう。
- 本児のよさやほほえましいエピソードをたくさん連絡帳で知らせてあげよう。また、発達段階をおさえて、この時期に出来ること、これからできるようになることも知らせてあげよう。

③経過

- 保育士とのやりとりや、園で歌っている歌を紹介したり、本児の様子を具体的に連絡帳で知らせる。
- 7月31日（月）（資料3-1）
- 8月2日（水）（資料3-2）
- 8月4日（金）（資料3-3）
- 8月10日（木）（資料3-4）

④結果

- 「どんな事を家でしてあげればいいのかわからなかつ

た」と言われていたお母さんが、「そういえば、家でもこんなことすると喜びました」「こんな事ができるようになりました」と、家庭での姿を保育士に伝えてくれるようになり、本児の成長を喜びながら育児されている様子が聞かれるようになってきた。

○日中ほとんど保育園で過ごしている子どもの様子を伝える時に、家庭でも保育園と同様にできそうなことを知らせてあげることで、育児の楽しさをタイムリーに共感していけているようである。

4. まとめ

1日24時間を視野に入れた保育を基本にして、家庭生活と保育園での生活に連続性、継続性のある保育を行うことで、子どもも保護者も安心できるのではないかと、という仮説のもとに実践を行ってきたが、その結果次のことが考察された。

家庭での子どもの様子を保護者から聞いたり、連絡帳から読み取ることで保育の「ヒント」を得ることができ、子どもの欲求に適切に答えてあげることができる。

乳児の場合、自分の欲求を言葉で伝えることが出来ない分、グズグズ言うことがあるが、生活の様子、例えば食事の時間や内容、睡眠時間、家庭での親子での時間の過ごし方を考慮することで、どんな欲求を保育士にしているのか見当をつけることができる。そして、それらの欲求に対しても、家庭でのやり方に合わせた方法をとることで、子どもたちは、安心感をもって受け入れているようである。

子どもは、まず欲求を十分に満たしてもらうことで、情緒が安定し、保育者に信頼感をもつようになる。特に、体調が悪い場合、その子の様子を良く見て、生活の仕方に配慮することで不快な状態が少し改善されて、落ち着いて過ごしているようである。

子どもが、安心して安定して保育者と過ごせるようになると、保護者はまず安心して、保育園に預けられるようになっていくように思う。家庭での「育児」に心をよせ、保育士として専門的な立場からアドバイスをし「育児」を応援することで、保護者と良い関係がもてるようになる。

子どもを取り巻く家庭環境はまちまちで、「育児」に対する思い、方針もそれぞれ異なっているが、仕事をもつ両親、とりわけ母親にかかる「育児」の負担は大きいと察せられる。

家庭での子どもの様子を聞いたり、連絡帳で知らせてもらうことで、保護者が「大変だな」と思っている所に気づき、「大変ですね。」と心を寄せて、「保育園でも同じように取り組んでみますよ。」と協力したり、「保育園ではこのようにしています。他にもこのような方法がありますよ。」とアドバイスをすることで、「育児」の負担を軽減し、楽しく感じてもらえるようにすることで、保育士に対する信頼を深め、安心して預けられるようになっていると思う。

5. 今後の課題

子どもの様子を伝え合うのに、「連絡帳」を今後も利用していきたいと思っているが、なかなか連絡帳を書いてもらえない保護者にどうすれば書いてもらえるようになるのか？保護者の負担にならず、手軽に書いてもらえる連絡帳の形式などを考えていきたい。

今回行った「保育実践研究」をもとに、今後とも「保育士」としての専門性を高め、保護者に安心して預けてもらえる保育を追求していきたいと思う。